

生活の中にある「具体的な事実」から、その園児の中で育ちつつあるものを理解する「教育及び保育」という言みは、その園児を理解することから始まります。生活の中にある「具体的な事実」からその園児の中で育ちつつあるものを捉えることが重要です。まずは、「　　していた」「　　とつぶやいていた…」など、その園児の息づかいや体温を感じ、その園児に寄り添いながらその姿をメモに取ったり、写真に撮ったりしながら「具体的な事実」を多く集めていきます。そして、それらの集めた事実を基に、何が育ちつつあるのかを解釈していきます。

ただ、その解釈の精度を高めていくには、園内の保育教諭等同士での日々の話合いや園内研修で検討し合うことなどが必要です。「具体的な事実」の中にある園児の姿から具体的なねらいを立て、その園児の姿から振り返ることを大切にした実践でありたいものです。

では、実際に園児を理解していく際に大切にしたい保育教諭等の視点や、方法などについて考えてみましょう。

園児と保育教諭等との温かい関係を育てる

移行や入園間もない3歳児の頃は、保育教諭等との信頼関係に支えられながら、新たな生活に慣れ親しんでいきます。

A児は入園してすぐの頃、毎朝保護者と離れる際に泣き、保護者を求めていた。担任は「離れるのは嫌だよね」とA児の気持ちを受け止めながら抱っこをして気持ちが落ち着くように関わりながら、少しずつA児が周囲の環境に目を向けられるように言葉を掛けていった。

A児は虫に興味をもっていたので、保育室の入口にダンゴムシの虫かごを用意し、目が向くように指をさしながら話し掛けた。興味をもっているものを見付けると涙も引いていき、「ダンゴムシ捕まえに行く！」と気持ちが切り替わり、部屋の外に出て行く。担任が遊びの中で顔を見合わせながら一緒に捕まえたことを喜んで笑顔で接していくことで、登園の際も担任の姿を見つけて笑顔で保育室に来る姿に変わっていった。

園児一人一人の成長を願い、「　　できるようになってほしい」などという思いは保育教諭等であれ誰しももつものですが、保育教諭等の思いや願いの前に、その園児の思いや願い、心もちなどを受け止めることがまず必要でしょう。

また、園児が保育教諭等と一緒に活動する中で保育教諭等が「楽しいね」とその園児に共感したり、「できた」という瞬間や、走っていて転んだときなどに保育教諭等に目を向ける際、「すごいね」「痛かったね」と、その瞬間を逃さずに目を合